

— 広告 —



鈴木翔登 (すずき しょうじ)  
金沢工業大学  
建築学部  
建築学科三年  
静岡県立浜松西高等学校出身

## プロジェクトの空気を変えた、 高校野球で培った組織運営。

「一番、シヨート、鈴木くん」。甲子園を夢見て白球を追った高校時代。強豪校の壁を破るため、監督は「考える野球」を部員に徹底した。副キャプテンの鈴木さんは、練習メニューの組み立てや工夫はもちろん、試合の先発メンバーや打順の決定まで一切を仲間と話し合っ

て決めた。「状況や相手の気持ちを常に察して地域や企業が抱える課題の解決に取り組み。週二回、放課後に集まり、依頼を受けたテーマを学生の視点で検討し、家具なども製作するが、六十名を超える大所帯ならではの悩みもあった。

それは、「どうすれば全員でクリエイティブな楽しさを共有、共感できるか」であり、これまでのプロジェクトの進め方を少し見直すことにした。そこで取り入れたのが、「考える野球」で学んだ風通しのよいフラットな組織運営で、結果意見交換やアイデア出しが以前より活発になった。今年四月には、野々市市内の旧北国街道沿いにある広場を、住民が世代を超えて集う賑わい空間にする事業を企業と手がけ、成果を上げた。

この時の経験が、鈴木さんがリーダーを務める学科プロジェクト「Toiro(といる)」に活かしている。同プロジェクトは建築学科の学生を中心に、ものづくりを通して

的でなく、あくまでも手段。建築物は、家族や友人、地域やゲストなどの安全や安心、交流や思い出を育むためにあると思っんです。ならばと、建築への関心が芽生えたきっかけを聞いた。「問題を抱えた家を設計士が劇的にリフォームしていく、あの番組です」。毎回、家族五人でそろって見たそうで、記憶に強く残るのは、テレビを囲み和やかな空気に包まれる我が家の情景と、プロとして施主の思いを汲み、その期待を感動の域まで高める匠たちへの憧憬である。

して動けてこそ一流だと教わりました。残念ながら予選で負けましたが、強まった部員同士の結束や、味わうことができた達成感は今も宝物です。

鈴木さん自身は、プロジェクトの現場で住民や企業人とコミュニケーションを重ねるうち、自分めざす建築家像が次第に鮮明になったという。「技術やデザインは目

最近、建築物を見たり、講演を聞いたりする時間が増えたと話す鈴木さん。「特に、京都の寺や神社を回るのが好きなんです」。バッグに御朱印帳も忍ばせる建築家の卵は将来、どんな空間づくりをするの

KIT  
キャンパス  
レポート  
文・杉村裕之

金沢工業大学  
石川県野々市市扇が丘七-1  
電話番号(076)21481100